

019 紀伊半島秩父帯南海層群の層序と地質年代

田中 均 (熊大・教育)・高橋 努 (八千代エンジニアリング (株))

一瀬めぐみ (筑波大・院)・柏木健司 (大阪市大・院)

Stratigraphy and geological ages in the Nankai Group of the Chichibu Belt, Kii Peninsula. Hitoshi TANAKA, Tsutomu TAKAHASHI, Megumi ICHISE and Kenji KASHIWAGI

南海層群相当層は、従来四国の徳島県まで知られていたが、最近、紀伊半島東部に位置する志摩半島の松尾層群までその分布が確認された (田中ほか、2000)。この事実は、従来四国の物部川層群に対比されていた松尾層群の西側に分布する南勢層群 (下位の泉川累層と上位の五ヶ所浦累層) や紀伊半島の有田地域の下部白亜系の再検討を意味している。今回は、これらの地域の地質について検討を行った。

南海層群美良布層およびその相当層の岩相や産出化石等の特徴は以下に記す通りである。

- ① 鳥巢層群 (今浦層群、池之上層) をその下位層準に密接に伴う。
- ② 礫岩、砂岩、砂岩泥岩互層からなり、石英質砂岩を伴う。
- ③ 産出する化石には *Aguilerella (Yoshimopsis) nagatoensis*, *Eomiodon matsumotoi*, *Hayamina carinata*, *Tetoria yoshimoensis* 等が認められる。
- ④ 海成層を挟在し、浅海生二枚貝化石 (*Pterotrigonia kawaguchiensis*, *Nanonavis yokoyamai* 等) を産出することがある。

松尾層群、南勢層群泉川累層および有田地域の西広地区に分布する西広層は、上記内容の①,②,③が確認され南海層群を構成する地質体である。③の汽水生二枚貝化石群から地質時代を決定することはできないが、それらの化石を含む大分県の山部層や熊本県の川口層はアンモナイト等を含む海成層との層序関係からほぼバランギニアン～前期バレミアンと考えられている。したがって、今回検討したそれらの地質体の地質年代は山部層や川口層の地質年代 (バランギニアン～前期バレミアン) とほぼ同じと考えるのが妥当である。また、南勢層群五ヶ所浦累層は、②,④の特徴を示すことから南海層群を構成する地質体である。今回、この累層からは汽水生二枚貝化石は未発見であるが、上部砂岩層 (坂、1978) から④で示した浅海生二枚貝化石の他に *Pterotrigonia yokoyamai* を確認した。 *P. yokoyamai* は東北地方の宮古層群 (アプチアン～アルビアン) および四国の南海層群生名層 (アルビアン) から産出の報告がある。したがって、本累層上部砂岩層は産出した浅海生二枚貝化石群の産出レンジを考慮すればアプチアンの可能性がある。